

出張報告

沖縄の色

三星宗雄

*この報告書の内容は1月23日(水)に開催された第1回研究発表会での発表内容に基づいている。また同名の題目で、人文学研究所報第41巻に投稿した。したがってここでの報告は最小限度に止める。

今回の調査の目的は、沖縄における自然環境および建築物等における色彩の特徴を抽出し、それらと沖縄の歴史および文化との関連性について明らかにすることであった。基本的には写真撮影によった。重要と思われる部分については、持参した「JIS色名帳(系統色名)」を用いて測色した。また必要に応じて測色時の照度を持参した照度計(ミノルタT-10)を用いて測定した。

以下結果について記す。図表、画像についてはこの巻に掲載されている論文を参照して欲しい。

1. 沖縄の自然環境

(1) 植生

フクギ(福木)に注目した。フクギはフィリピンや台湾原産の常緑高木で、沖縄では家の周りに植えられ、防風林、屋敷林として用いられている。光沢のある、肉厚の緑の葉は冬でもボリュウムがあり、その存在感を感じさせた。5月ごろクリーム色の小さな花をつけ、その花が落ちて、庭と垣根を越えて外側の道路を埋め尽くす。うっすらと黄緑色に変わった道路はじゅうたんのようで、土足で歩くことが躊躇されるほど軟らかいという。実は6月ごろにでき、直径6cmぐらいで、熟するとちょうどカキに似ているという(安間, 2007)。ぜひ一度体験したいものである。

ススキの多さが目についた。沖縄のススキは、関東近辺でみるものに比べやや灰色がかっており、花の形もやや異なるようだ。沖縄のススキがこのように蔓延しているとは予想外であった。ススキは沖縄本島よりもさらに南の石垣島でも、原を形成するほど繁茂している(安間, 2007)。チガヤも多い。またリュウキュウマツ(県木)もそこいらに見られた。私たちにはなじみ深いブーゲンビリアやハイビスカスなどの花はいたるところに見られた。沖縄を代表する特産物であるパイナップルとサトウキビの花は、残念ながら時期的に見ることができなかった。いずれも花の色は白である。

こうした植生は以前訪れたアマゾン河流域とは明らかに異なった印象であった(三星, 1993)。熱帯と亜熱帯という気候帯の違いがあるかも知れないが、沖縄の植生は明らかに日本とのつながりを強く感じさせた。11月下旬で少し早かったせいか、山には紅葉はほとんど見られなかった。ハゼノキのような紅葉する落葉樹もあるようだが、目立っていない。

こうしたススキ、パイナップル、サトウキビの白い花、および屋敷林としてのフクギの緑色は明らかに沖縄の風土色となっている。ちなみに那覇市都市計画部都市デザイン室によると、市民によるアンケート調査から、那覇市の「まちの色」を白と定めているという(山川, 1999)。

(2) 沖縄石灰岩とサンゴ

植生以外で目立つ自然環境では、やはり同じ白の沖縄石灰岩とサンゴの死骸からなるビーチであろうか。石灰岩は純粋な白ではなく、黄白色と言われる、黄色と白とが微妙に入り混じった、ややデコボコがある材質である。水底に積もった動物の殻や、骨などが素材となり、長い時間をかけて形成されたとされる(村山, 1999)。建築物ばかりでなく、家屋を囲む石垣や道路の材料として用いられる。ただ今日建築される家屋は99%コンクリート造であるという。しかし、その外壁の色は明らかに沖縄石灰

岩の黄白色を志向している。

沖縄を象徴するあの白い砂浜は実は「砂浜」ではなく、「サンゴ（の死骸）浜」であった。こちらの白は「真っ白」である。

2. 建築物

(1) 赤瓦

沖縄の街並みを彩る色は赤瓦の赤である。瓦屋根が平民に許されたのは明治以降であり、しかも最初は灰瓦が多かったという。しかし現在では赤瓦が主流である。赤瓦と言ってもその色には、赤～黄赤まで多少幅がある。

高層とまではいかないが、いくつかかなり高いマンションを見た。しかし、街中と郊外を問わず、必ずといっていいほど、屋根が、しかも赤瓦またはそれを志向した赤い屋根をいただいていた。その光景は必ずや見る人の目を和ませているに違いない。建築物の高さに対するある種の補正となっているようだ。

首里城から那覇の街並みを見下ろすと、赤瓦の色が散在するのが見える。赤瓦で埋め尽くされているわけではないが、360度にわたって視界に入ってくると、そこにはやはり統一感が感じられる。

(2) シーサー、ヒンプン、石巖当、亀甲墓

これらは風水思想によるものとされるが、筆者には造形物として、ある種のアート性、遊び、精神性が感じられた。それらは昨夏ロンドンで見た、アート性の強い橋桁や欄干の橋や彫刻のある、道路端の「単なる」ベンチを思い起こさせた。上に述べた瓦屋根などもアート性を含んだ造形物である。ある大きな警察署で、そのエントランスになだらかな曲線を描いた、唐破風状の「向拝」をいただいているのを見た。しかも建物全体がうすい青色なのである。遊びどころ十分である。

風水思想はその空間表現に関して、地を女体・母胎として見立てた大地母神的な信仰から生まれたとする説がある。そうした造形物から醸し出される優しさ、おおらかさ、ゆとりのようなもの。著者にはそれこそが沖縄を象徴する風土と思われるのである。